論 文 審 査 の 要 旨

博士の専攻分野の名称	博　士　（　学　術　）	氏名	蘇　丹
学位授与の要件	学位規則第４条第①・２項該当		

論　文　題　目

類義語動詞の語彙的意味の研究：日本語の「習得」に関する動詞を中心に

論文審査担当者

主　　査	教授	吉田　光演
審査委員	教授	井上　永幸
審査委員	教授	荒見　泰史

〔論文審査の要旨〕

本論文は、「習得」を表す日本語動詞を研究対象として、語彙主義を中心とする構成論的アプローチから類義動詞グループの語彙的意味を記述することを目的とする。

本論文は七章からなり、序章と第一章で研究背景と方法について述べ、「習得」関連動詞として「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う、修める、習得する、マスターする」を抽出し、「学ぶ、学習する」等の動作動詞と「修める、習得する」等の変化（達成）動詞に分類し、動詞のアスペクト、語彙概念構造 (LCS) 、動詞の項構造・意味役割、動詞のクオリア構造（特質構造)、日本語・中国語の複合動詞の対照、思考動詞との対比の側面から先行研究を検討した。第二章では動作動詞と変化動詞の２つのグループの限界性・意志性・変化特性の点から「習得」動詞のアスペクトを考察した。第三章では Vendler (1967) のアスペクト分類に従い、「習得」動詞を活動動詞と達成動詞に分け、活動動詞の LCS と達成動詞の LCS を分析し、達成動詞は CAUSE（使役）という関数によって「原因」と「結果」を連結していると分析した。第四章では、小野 (2005)、影山 (2005)による動詞のクオリア構造に基づいて活動動詞と達成動詞タイプの構成クオリア、形式クオリア、目的クオリア、主体クオリアの構造を分析し、達成動詞の主体クオリアと目的クオリアは「原因」と「目的」を表すことを示した。第五章では中国語の“学会”“学到”という結果複合動詞と日本語の複合動詞「学びとる」との対照を行い、中国語では CAUSE の連結は統語的であるが、日本語では語彙的であり、複合動詞における前項動詞と後項動詞の複合レベルに相違があり、“学会”は他動性が高く、“学到”では CAUSE はあるが他動性が低いことを示した。第六章では「習得」動詞と思考動詞を比較し、思考活動と限界性・意志性・持続性のアスペクトで両者は似ているが、「習得」動詞は思考動詞とは異なり、主観性は持たないことを示した。第七章は論文の結論である。

本論文は、類義語動詞の語彙的意味の分析方法として語彙主義を中心とする構成論的アプローチを提案し、日本語「習得」動詞の意味特性を明らかにした。「学ぶ」等の動作動詞は開始限界と終了限界があり、動作継続、主体動作の側面を持ち、「修める」等の変化（達成）動詞は終了限界、変化結果の持続、主体変化及び変化プロセスの側面を持つことを実例に基づいて説得的に示した。さらに、これらの特徴を語彙概念構造によって明示し、動詞がどの項を取るかについての項構造を示し、２つのグループのクオリア構造の違いを示した。「修め

る・学習する」等の「習得」動詞について、このように詳細に理論的考察が行われたものはほとんどなく、その意味で本論文の意義は大きい。この構成論的アプローチは他の類義語動詞グループに応用できることも示唆しており、この点も期待できる。今後の課題として、動詞語義の歴史的変化を考察し、中国語複合動詞との比較において中国語動詞の語彙を増やすことがあるが、日本語の「習得」に関する動詞について、語彙アスペクト、項構造、複合動詞、語彙概念構造、クオリア構造などの側面を横断的、統一的に考察した点、この動詞グループの活動動詞と変化（達成）動詞の相違を明らかにした点は本論文の成果として高く評価できる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（学術）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。